407. 胃 X 線撮影法における少量圧迫法の検討

Study of Compression Method Using Small Quantity barium for Gastric Radiography

済生会唐津病院

Saiseikai Karatsu Hospital

○一木則生 ・ 柿木 弘 ・ 井筒屋 修

(Norio Ichiki) (Hiroshi Kakigi) (Osamu Izutsuya)

(目的)

胃 X 線検査法、圧迫法に於いて隆起性病変を描出するには、圧迫の強弱が左右するのは周知のごとくであるが、患者の体型による圧迫不良は避けられないことである。今回胃 X 線撮影で肥満体や腹直筋の発達した患者の前壁隆起性病変の描出能の向上を目指し少量圧迫法の有用性について検討した。

(方法)

当院で施行した胃 X 線検査件数 1043 例の内、少量圧迫法を施行した 552 例を対象とした。使用バリウムは微粒子（ウムブラゾル A）と粗粒子（バリトゲンデラックス）を 1：1 の割合で混合したものを濃度 150 W/V% で使用した。バリウム服用量は、少量圧迫法は 1 口また 2 口約 25～50 ml 服用に対し、通常の圧迫法では 250 ml バリウムを服用、圧迫の手技としては、少量圧迫法では、バリウム服用直後に圧迫を行い、十二指腸のバリウム流出に注意しながら軽い第一斜位で胃前庭部から胃角の方向へしごき上げるように圧迫を加える。

(結果)

少量圧迫法を施行した 552 例中、隆起性病変の描出は 60 例（有病率 10.8%）であった。この 60 例中 51 症例は少量圧迫法及び二重造影法、通常の圧迫法のいずれかに描出、残りの 9 症例は、少量圧迫法のみ描出され、前壁二重造影法、通常の圧迫法ではまったく描出不能であった。この少量圧迫法のみで病変を描出し得た 9 例を検討してみると 7 例が 20% 以上の肥満症例及び腹直筋の発達した症例であった。（症例 1）は、少量圧迫法で胃角前庭部寄り fold 上に軽度隆起を呈すポリープ像を認め通常の圧迫法では描出不能。（症例 2）は、少量圧迫法のみ描出された症例で胃角部前壁に平盤状に隆起を呈し、中央部は不整形な陥凹、内視鏡で II a + II c の所見、前壁二重造影法、通常の圧迫法では病変が描出されなかった一症例。

(結論、考察)

圧迫法で描出不能原因を 3 つあげると

1、体型による肥満者、腹直筋の発達した人 2、幽門屈曲の重なり 3、小腸の胃部への重なり があげられる。そこで、少量圧迫法は、微細病変の存在診断の目安になることは以前からいわれていたが、今回の試みで、肥満者および体格の良い患者の胃前庭部前壁隆起性病変の検出において少量圧迫法は有用であると思われた。即ち、体型を太った体型、普通の体型、やせた体型に分けると、太った体型は、少量圧迫法で描出されやすく、通常の圧迫ではされにくい。普通の体型では、少量圧迫法、通常の圧迫法とも描出されやすい。やせた体型では、少量圧迫法では描出されにくく、逆に通常の圧迫法で描出されやすいと考える。

(表 1)

症例 1

症例 2

-体型による隆起性病変の描出能分類-

体 型	肥 満 体	中 間 型	痩 せ 体
描 出 能	○	○	△
描 出 し 難 い	×	○	○

○ : 描出されやすい

× : 描出されにくい

表 1